

オーストラリアのマス・メディア

Ⅱ 研究ノートⅡ

鈴木雄雅

(上智大学)

日豪経済関係の緊密化から、ここ数年来日本でオーストラリアに関する多くの書物が刊行されている。しかし、マス・メディア関係の文献で、日本で紹介されているもの、邦訳されているものはほとんどないと言ってよい。

そこでこの空白を埋めるために、比較的入手しやすく、しかもマス・メディア研究者の間で周知の文献を、年代をおって概観したい。この中には政府刊行物も含まれるが、学術雑誌、紀要、モノグラフなど掲載の論文は、原則的に割愛する。「マス・メディア一般」の項では、近年刊行されたマス・メディアの構造、機能などに関する文献を掲げ、事典、年鑑及び文献解題類をも網羅する。なお、紙幅の都合上、放送関係の主要文献と邦字(訳)文献は、最後に一括して掲げることにする。

一 事典・年鑑・文献解題

- オーストラリアの代表的大百科辞典として *The Australian Encyclopedia* (1st ed., 1926-27, A & R, 2 vols; 2nd ed., 1958, Grolier Society, Sydney, 10 vols; 3rd ed., 1977, Grolier Society, 6 vols) をあげることができる。いわゆる「旧版」(第二版)の索引付き全十巻の方が、最新版よりマス・メディアやジャーナリストらの項目が多く、内容も豊富である。まずは、オーストラリアのマス・メディア—特に、Australian, Broadcasting, Newspapers, Overland Telegraph Lines, Periodicals, Post and Telecommunications, Printing, Publishing, Television—について、個々の概略を知ることができる。
- J. A. Ferguson, *Bibliography of Australia* (A & R, 1941-69, 7 vols; facsim., ANL, 1976) は、一七八四年から一九〇〇

年までのオーストラリアの貴重な歴史的資料をあげているし、植民地新聞、印刷の発達についても詳しい。ただし、説明が新聞別、出版別になっているので、同書から系統的な知識を得ることは難しい。

マス・メディアを主とした文献解題もいくつかある。⁽²⁾

H. Mayer, *Bibliographical Notes on THE PRESS IN AUSTRALIA and related subjects* (Dept. of Govt., 1964, 76p. タイプ印刷) は、現在シドニー大学教授(マス・メディア、政治学専攻)ヘンリー・メイヤーがまだ同大学講師であったころ、第一次資料を含め数多くの研究文献、学術・雑誌論文を紹介したもので、この領域の先駆である。時代的に新鮮さを感じさせる文献ではないが、オーストラリアのマス・メディア研究者の誰もが一度はひもとく程価値のある文献解題である。内容は新聞全般にわたる文献(索引・年鑑類、発行部数、法律、地方、宗教、移民紙、労働者紙など)の紹介、各州の新聞の歴史、ジャーナリスト、漫画や同人雑誌を含めた雑誌メディア、広告やPRといった具合に幅広く文献を網羅している。ただし、放送メディアに関するものはない。

同じメイヤー教授主編の H. Mayer, M. Betison and J. Keene, *A Research Guide to Australian Politics and Cognate Subjects* (Cheshire, 1976, 329p.) は、社会科学系の文献解題である。新聞、雑誌、放送、広告といったマス・メディアに限らず、マス・カルチャー、社会構造、世論などの主要参考文献を一、五〇〇点以上あげている。巻末の「オーストラリアの雑

誌索引」と「新聞年表」は便利である。同書は現在も比較的手に入りやすい。

首都キャンベラにある国立図書館 (ANL) が逐次刊行している *Newspapers in Australian Libraries* の最新刊 *A Union List Part 2 Australian Newspapers* (3rd ed., 1975) は四千以上にのぼるオーストラリア全土の新聞を掲げ、題号の変遷、所蔵図書館、所蔵内容が一目瞭然で、非常に便利な文献である。また、同書にはオーストラリアの全図書館(大学付属なども含め)と主要新聞社の所在一覧が載せられている。なお、同様に併刊されている *A Union List Part 1 Overseas Newspapers* (3rd ed., 1973) は、オーストラリアの図書館に眠っている日本及びその他世界各国の新聞を網羅している。⁽³⁾

Press, Radio and TV Guide: Australia, New Zealand and the Pacific Islands (Sydney: Country Press, 1914+) は幾度か題号を変えたが、一九一四年以来続刊の代表的マス・メディア年鑑の一つで、ニュージーランドとパプア・ニューギニアなども含んでいる。しかし、『新聞年鑑』などと違い、新聞社、放送局についての説明はむしろおまじりで、内容は乏しい。

同様な年鑑に *B & T Year Book: Broadcasting and Television, Australia's Advertising and Media* (Sydney: Greator Publications, 1958+) がある。前掲のものより広告関係などに重点をおく。週刊の *B & T Advertising, Marketing & Media Weekly* もある。

ところで、オーストラリア政府は政府刊行物出版サービスA GPSを通して、連邦全体の統計・数値などをまとめる多くの出版物を出している。その代表格とも言える *Year Book Australia* (AGPS, 1908+) は、残念ながら、マス・メディア関係の項目は含んでいないが、各州発行の年鑑には、入植前後からの州史及びマス・メディア概略史に数ページをいっているものもある。

行政管理省に属するA I S (Australian Information Service) が編集するレファレンス・ペーパーの *Communication* 1977 (AGPS, 1977, 17p.), *The Media* (AGPS, 1979, 16p.) は小冊子程度のものだが、新聞、通信社、ラジオ、テレビの各メディアについて、オーストラリアの実情をわかりやすく説明している。

二 歴史・社史

オーストラリアで初めての新聞 *Sydney Gazette and New South Wales Advertiser* ⁽¹⁾ が現われたのは一八〇三年、入植(一八七七年)十五年後のことである。それまでの「新聞前史期」については、印刷に関する文献に焦点が絞られる。

その手初 ⁽²⁾ *Historical Records of Australia, Ser. 1, III & IV* (The Library Committee of the Commonwealth Parliament, 1914-25) ⁽³⁾ を一読しておく必要がある。同書は入植以来のオーストラリアとイギリス本国との関係文書、植民地内部でのちまちまなびき事に関するドキュメントを集録したも

のである。これは *Historical Records of New South Wales, 1762-1811* (Sydney: Government Printer, 1893-1901, 7 vols.) を加えれば、植民地政府として総督とジャーナリズムとの「フランスの自由」をめぐる闘争の一端を探ることが出来る。*JRAHS* (Journal of Australian Historical Society, 1906+) に代表されるいくつかの歴史学会の紀要は、例えば、次のような創始期のジャーナリズムに関する論文を掲載している。

- ・ E. Dowling, "Early Colonial Printers," *JRAHS*, Vol. 1, Part 2, June, 1906, pp. 14-20.
- ・ J. A. Hogue, "Governor Darling, the Press, and the Collar", *JRAHS*, Vol. 2, 1907-09, pp. 308-323.
- ・ A. G. Foster, "G. Howe and the 'Gazette' office", *JRAHS*, Vol. 10, Part 2, 1924, pp. 103-18.
- ・ J. A. Ferguson, "Edward Smith Hall and the *Monitor*", *JRAHS*, Vol. 17, Part 3, 1931, pp. 163-200.
- ・ R. C. Rogonski, "The History of Journalism and Printing in the North of New South Wales," *JRAHS*, Vol. 24, Part 5 & 6, 1938, pp. 397-441.
- ・ G. Mackaness, "Printing in Australia", *JRAHS*, Vol. 6, Part 2, 1950, pp. 121-25.
- ・ J. M. Wicks, "Aspects of the Colonial Career of Robert Wardell," *Journal of Armidale and District Historical Society*, No. 16, 1973, pp. 1-17.
- ・ F. J. Meaney, "Governor Brisbane and the Freedom of

the Press in New South Wales : 1824-25," *JADHS*, No. 12, 1969, pp. 67-78.

さて、ニューサウスウェールズ植民地の印刷の歴史は、初代総督 Arthur Phillip (1738-1814) が第一次船隊 (1787年) で持ち込んだ木製印刷機が初めて使用された一八九五年までさかのぼる。一方、タスマニアでも、副総督所有の印刷機は一八〇四年以来、政府命令や広告など数々の重要なドキュメントを生んだ。もちろん、新聞を含めてである。

D.H. Borchardt, *The Spread of Printing : Eastern Hemisphere Australia* (Amsterdam : Vangendt, 1969, 45 p.) は各植民地のさうした経過を、印刷機の導入、印刷人として新聞の登場まで包括的に取り扱っている。二次的資料に頼り過ぎていふあたりはあるが、よくまとまったものと言える。

政府の検閲下ではあったが、最初の新聞という榮譽を持つ *Sydney Gazette* とその印刷・編集人 George Howe (1769-1821) としてオーストラリア・ジャーナリズムに深くかかわりあつた彼の一族については、*The Sydney Gazette and New South Wales Advertiser : A Facsimile Reproduction 1803-11* (Sydney : Public Library of New South Wales, 1963-73, 9 vols.)⁽²⁾ が初期の全貌を明らかにしている。

J.A. Ferguson, A.G. Foster and H.M. Green, *The Howes and Their Press* (Sydney : Sunnybook Press, 1934) はそれらをさらに深く追究し、完全の域に近い全史となっている。タスマニアで三番目に現われた *Hobart Town Gazette*

(1816-25) についての *A Facsimile Reproduction of*

The Hobart Town Gazette and Southern Reporter (Hobart : Platypus Publications, 1965, 4 vols.)⁽³⁾ がある。前掲書と同様、オーストラリア・ジャーナリズムの初期の全容をかいま見ることが出来る。

タスマニア・ジャーナリズムについては、E.M. Miller, *Pressmen and Governors : Australian editors and writers in early Tasmanian* (A & R, 1952) が総合的な研究書として第一級である。ミラーはその他多くのタスマニア・ジャーナリズムを論じており、その権威者として知られている。

E.M. Miller, "A Historical Summary of Tasmanian Newspapers," *Tasmanian Historical Research Association, Papers and Proceedings*, 1952, pp. 17-21, 1953, pp. 34-39.

"An Unrecorded Hobart Town Gazette," *THRA, Papers and Proceedings*, Vol. 7, No. 3 & 4, 1959, pp. 34-43, 59-65.

ハウと並ぶ称されるタスマニアの印刷人 Andrew Bent (1790-1851) 個人に焦点を当て、詳細に論じた J. Woodberry, *Andrew Bent and the Freedom of the Press in Van Diemen's Land* (Hobart : Fullers Bookshop, 1972) は「オースの自由」をめぐるこのジャーナリストの葛藤、植民地政府、特に George Arthur (1784-1854) 副総督の新聞政策などを克明に論証している。同書は内容もしっかりしており、信頼度も

高い。

新興著しいシドニー郊外マックオリー大学Macquarie Universityの歴史学教授 Robin Walker は、植民地の重要なコミュニケーション・メディアとしての新聞の発達（通信も一部含む）に注目、その効果分析を試みた *The Newspaper Press in New South Wales: 1803-1920* (SUP, 1976, 272p.) を発表した。一九二〇年代までではあるが、この時代の「新聞発達史」と呼べる唯一の文献であろう。歴史家らしく、新聞の所有者、印刷人の変遷、ジャーナリストらの興亡をきめ細かく考察し、経営面からも論証している点など、従来ほとんどとられたことのない方法である。地方紙、日曜紙、労働者の動きと新聞、そして特色ある新聞といった具合に、ウォーカーは積極的な分析を試みている (Ch. 12, *Labour in Slow Motion*, pp. 127-44. Ch. 15, *The Country Press*, pp. 173-88)。同書はニューサウスウェールズ植民地に焦点を絞っているものの、社会・政治的背景とイギリス本国を絡み合わせ、海外ニュースの配信について語っている点も興味深々 (Ch. 17, *Lines from a Line*, pp. 200-09)。続刊にあたる *Yesterday's News: A History of the Newspaper Press in New South Wales from 1920 to 1945* (SUP, 1980, 243p.) も出版された。

次に、主に二十世紀以前の植民地時代のオーストラリア・ジャーナリズムをまとめたものを、くっつか紹介しよう。

J. Bonwick, *Early Struggles of the Australian Press* (London: Gordon & Gotch, 1890, 82p.) は記述にあまりない点

が多いのと出典が不明確であることを差し引いても、植民地、新聞別に、十九世紀半ばまでの新聞の実情を顧みることができ。各紙の「創刊の趣旨」など実証的に多くの新聞記事を掲げている。

一方 I. Brodsky, *The Sydney Press Gang* (Sydney: Old Sydney Free Press, 1974, 192p.) は、ヨーロッパ社会における新聞の発達から二十世紀初頭までのシドニーの新聞について語っている。基本的には、「金と力」がついてきた新聞が、大衆のニュースへの渇きと好奇心にそそられる興味を引き、時に興奮させ、ある時は冷却させ、彼らに新聞を購読する習慣をつけさせていった過程に着眼している。逆に、それは大衆が欲する新聞への成長時にあったとも言えるだろう。「個人的な見解ではあるが」と著者は断わりながらも、「新聞は劇場シアターのようなもので、進行中のショーあるいは幻影である。娯楽の名の下に、しばしば過分に脚色される喜劇と悲劇に似たものだ」と論述している。オーストラリアのマス・メディア文献には珍しい「新聞年表」が付いている。

一八三一年に名もなき三人の若者によって創刊された *Sydney Herald* は、九年後日刊となり、現在も引き続き発行される人気のある *Sydney Morning Herald* (SMH) につながる由緒ある歴史を持つ。その創刊百周年を記念して刊行された *A Century of Journalism: the Sydney Morning Herald and its record of Australian life, 1831-1931* (Sydney: J. Fairfax & Sons Ltd., 1931, 805p.) は「社史」といって事を考慮しても、

非常によくまとめられている。SMHのたどった苦難の道、そしてオーストラリア社会の軌跡を見事に表わしている文献の一つに数えられるだろう。また、最近刊行された G. Souter, *A Company of Heralds* (MUP, 1981, 682p.) は御用社史とは一味違った見方で、現代に通じる同紙の百五十年を描いている。

The Sydney Herald: A facsimile reproduction (Sydney: J. Fairfax & Sons Ltd.) は、一八三一年四月十八日から翌三二年一月二日(創刊一三八号)までの「復刻版」と言えるもの。また John Fairfax (1804-77) の手に渡る前の週刊の *Sydney Herald* の様子を眺めることができる。

連邦結成(一九〇一年)までの各植民地におけるジャーナリズムの発達について述べている文献に目を転じると、南オーストラリア植民地の新聞、印刷に関しては、G.H. Pitt, *The Press in South Australia: 1836-50* (Adelaide: Wakefield Press, 1946, 61p.) が十九世紀半ばまでを網羅しつつ唯一の文献である。

同植民地最初の新聞 *South Australian Gazette and Colonial Register* (後の *Register News-Pictorial*, 1836-1931) は一八五〇年代に登場した *The Advertiser* (1858+) とともに、十九世紀後半までに安定した地盤を築いた新聞であった。この二紙については、J.J. Pascoe, *History of Adelaide and Vicinity* (Adelaide: Hussey and Gillingham, 1901, rpt. by Alan Osterstock) がそれぞれ章を充ちて論じている(“The Register”, pp. 590-97, “The Advertiser”, pp. 601-07)。

また、E.K. Thomas, ed., *The Diary and Letters of Mary Thomas: 1836-66* (Adelaide: W.K. Thomas & Co., 1915) は、見方こそ違いが、*Register* の創刊者 Robert Thomas (1782-1860) の妻 Mary Thomas (1787-1875) の目を通して、初期の南オーストラリア植民地の印刷人がなめた辛酸を描いている。

ゴールドラッシュで人口爆発をみたビクトリア植民地のジャーナリズムに焦点を当てた研究文献は見当たらない。しかし、最近刊行された G. Hutton and L. Tanner, ed., *THE AGE 125 Years of Age* (Melbourne: Nelson, 1979, 214p.) は、一八五四年に現われた *The Age* の今日までの歴史を編み出したものである。同書は *The Age* の記事を通じ、オーストラリア社会の百二十五年を描き出しており、「スクラップ帳」とも呼べるであろう。

M. Cannon, *The Australian Thunderer: “The Age” after the Gold Rush, 1854-59* (Melbourne: Heritage Publications, 1971) は前掲書と同様、*The Age* から九十以上の記事をまとめ、ゴールドラッシュ社会の記録としても適書である。ところで、十九世紀のオーストラリア・ジャーナリズムを知るうえで不可欠な文献がある。H.M. Green, *A History of Australian Literature* (A & R, 1961, 2 vols.) がそれで、新聞と雑誌について多くの紙幅を充ちている。同書は第一期「衝突」(一七八九—一八五〇年)、第二期「統合」(一八五〇—一九〇年)、第三期「気の弱いナショナリズム」(一八九〇—一九二三年)。

第四期（一九三三—五〇年）に区分され、各期については、次のような考証が試みられている。

△第一期◇

Servitude : The *Gazette*, Other Early Newspapers.

The Struggle for Freedom : Bent and Arthur. The *Australian* ; Other Free Newspapers. Eatanswill Rivalries

(Vol. I, Ch. V, pp. 65-83).

△第二期◇

Effects of the Gold-rushes. Syme and *The Age*, the

Argus ; the *Sydney Morning Herald* ; Other Newspapers

(Vol. I, Ch. X III, pp. 329-43).

△第三期◇

Effects of the "New Journalism" : *The Age*, the *Argus* as the *Sydney Morning Herald*, the *Daily Telegraph*

(Vol. I, Ch. X X, pp. 827-42).

△第四期◇

Ultra Modernity : The Country Newspapers ; the *Sun News-Pictorial*, the *Sydney Morning Herald* ; Other Newspapers. (Vol. II, Ch. X X I, pp. 1382-99).

中では「ホームランメントの影響」と題した第二期では Ebenezer Syme (1826-60), David Syme (1827-1908) の手に渡った *The Age* と新興紙 *The Argus* (1846-1957) ⁽¹⁷⁾ をしてフエアマックスの *SMH* について論じている。この論文は希少価値である。と言っているが、同時期が植民地であるのは小資本経

営の新聞から脱皮したジャーナリズムが著しい発達を示した反面、前の半世紀ほど波乱に飛んだものではなく、ごく静かに穏やかに進化したため、意外と焦点を当てて研究された事例が少ないからである。ただし、内容的に深い洞察がみられる論文とは言えない。

残念ながら、連邦政府樹立以降二十世紀半ばころまでのオーストラリア・ジャーナリズムを包括的に取り扱った適当な文献は見当たらない。しかし、次の項で紹介する文献の多くがある程度その辺を論述しているので、そちらの方へ譲ることにする。

一九一〇年に創立されたオーストラリア・ジャーナリスト協会 AJA はその発足五十周年を記念して *Crusade for Journalism : Official History of the AJA* (Melbourne : AJA, 1960) を刊行した。同書は、二十世紀以降のオーストラリア・ジャーナリズムをジャーナリスト側からの視点で語ってくれる数少ない文献である。

夕刊紙は十九世紀末から二十世紀前半にかけて躍進した。オーストラリアで初のペニー新聞として知られる *Evening News* (1867-1931) ⁽¹⁸⁾ と一九一〇年代に登場した *The Sun* ⁽¹⁹⁾ の社史 *The Evening News 1867-1926 : A Record of Process of Growth Australian Newspaper* (Sydney, 1926), *Sun Newspapers Ltd : 1910-29* (Sydney : Sun Newspapers Ltd., 1929) ⁽²⁰⁾ はオーストラリアのジャーナリズムにとって「困難かつ最も過酷」だった一九二〇—三〇年代を克明に描いている。

W.M. Ball, ed., *Press and World Affairs : Australia's*

Outlook (MUP, 1938, 148p.) は、オーストラリアのプレスから一九三〇年代の世界事情を眺めている。特に、ラジオに一章を充ててる点、ロシアと日本の進出に注目している点など興味深い (Ch. II A.G. Pearson, "The Australian Press and Japan," pp. 34-55)。

P. Coleman, ed., *Australian Civilization* (Cheshire, 1962) 所載の K.S. Inglis, "The Daily Papers" (pp. 147-75) は、全国紙 *The Australian* (1964+) 創刊前、つまり一九五〇年代のオーストラリアの日刊紙に焦点を当てた論文である。彼は当時の他の学者と同じように、オーストラリアは地理的、文化的、商業的理由から全国紙を育成、維持しえないと否定的な見解を示した。

Rupert Murdoch (1931〜) は ⁽⁵⁾ *The Australian* 創刊時、*The Australian: A Pictorial Record of the Establishment of a Great Newspaper* (Canberra: News Ltd., 1964, 22p.) を刊行した。これに対し、フェアファックス・グループに買収されて装い新たに出版した首都キャンベラ唯一の日刊紙 (当時) *Canberra Times* (1926+) が四十周年記念として発行した *The Canberra Times: The Capital Investment* (Canberra: J. Fairfax and Sons Ltd., 1967, 32p.) がある。前書は、マードックの全国紙創刊の勢いをよく示したものである。

三 マス・メテア一般

この項で最初に紹介すべき研究文献は、アメリカ人 W.S.

Holden, *Australia Goes to Press* (Michigan: Wayne State University Press, 1961, 297p.) とオーストラリア人 H. Mayer, *The Press in Australia* (Melbourne: Lansdowne, 1964, rpt., 1968, 281p.) の二冊である。両書とも十五年以上も前に発表されたものであり、印刷メディアに限られているが、今だにその内容分析の深さからマス・コミュニケーション研究の「古典的」入門書として珍重されている。残念ながら、両書とも現在ではほとんど入手不可能である。

ホールデンの文献は一九五六年から五七年にかけてオーストラリアのプレスを研究したものであるから、実際には二十年以上も前の時代を考察対象としたわけだが、オーストラリア・ジャーナリズムの本質をよく見抜いている。ホールデンの論証は経営面、編集面、ニュース配信、紙面分析、広告面、組織面そして購読者層について、あるいはジャーナリストの訓練といった具合に多方面にわたっている。巻末に付された十五の日刊紙の略史、プレス組織の概要、変わったところでオーストラリア特有のジャーナリズム用語などを紹介している。同書を要約した形でホールデンは、オーストラリアのプレスについて次のような論文を発表している。

・ "Metropolitan Daily Newspapers in Australia Today"
Journalism Quarterly, Vol. 45, 1968, pp. 713-23.

"Australia", J.A. Lent, ed., *The Asian Newspapers' 'Reluctant Revolution'* (Iowa: Iowa State University Press, 1971), Ch. 9, pp. 119-37, 小松原久夫、梶谷素久編

訳『アジアの新聞』（東京、東出版、一九七二年）

一方、メイヤーは三つの点から、オーストラリア・プレスを考察している。まず、歴史家たちがほとんど関心を示さなかったプレスの歴史、構造そして内容の基本的事実を述べ、次に、技術・経営的状况から「なぜ新聞は読まれるか」を論じている。第三点は、プレスを批判する者と擁護する者双方の共通態度の分析である。それらは、具体的に、次のような項目で論じられた。

1. The Origins of the Popular Press : England. 2. The Origins of the Popular Press : Australia. 3. Australia : The 20 th Century. A. The Function of the Press. 5. Press Economics. 6. The Press Indicted. 7. The Nature of News. 8. The Shaping of News. 9. Bias. 10. Villains: Owners and Advertisers. 11. Monopoly and Variety. 12. Parliament Versus Press. 13. Journalists. 14. What's in the Paper? 15. Readership and Attitudes. 16. Press Reform? 17. Press and Readers.

なお、第一版と第二版の間に現われた *The Australian* に関して、メイヤーは第二版の冒頭で数ページを費やして論述している。

政治学者 A.F. Davies 社会学者 S. Encel らが発表した論文 “The Mass Media” は、彼ら自身の編書 *Australian Society : A Sociological Introduction* (Cheshire, 1965, 333p.) に収載されている (pp. 205-209)。それは知られている限り、「マス・

メディア」を論じることを目的とした数少ない六〇年代の作品(1)と言える。オーストラリアのプレスとその支流を「偏狭かつ独占的」であると言いつわらわした彼らは、それに対する外側からの社会学的分析を試みている。同書は六〇年代の日刊紙—メルボルン中心—の状況とそのオーナーシップの集中化を批判。A B C (Australian Broadcasting Commission) とテレビ放送の内容分析、視聴者の態度に注目している。そして、「プレスにおける変化は社会の結果と同じように生じるものであり、その幾つかは受け入れられるものではない。いずれにせよ、プレスの影響は社会において比較的小さなものであり、他で批判される事柄のスケープ・ゴートにしばしばされてしまう」(傍点筆者) という見方をしている。

同書の第二版 (2nd ed., 1970) では、題目を “Mass Communication” と改め (pp. 516-39)、「マス・コミュニケーションの構造、過程、内容、効果などについて論じている。一九六九年当時のメディア・オーナーシップの解説図が付いている。

六〇年代のこうした研究文献をふまえて七〇年代に入ったオーストラリアのマス・メディア研究は、ゆっくりとした動きではあったが、研究領域の広範さからか、多くの分野で研究者の数も増えていった。

マス・メディアの総合的な研究書として、そうした七〇年代前半の先駆けとなったのは B. Dwyer, R. Milliss and B. Thomson, *Mastering the Media : A Guide to the Discriminating Use of the Mass Media* (Sydney : Read Education, 1971,

pt., 1971-74, rev., 1976, rept., 1977, 128p.) である。同書は新聞・広告といった従来取り上げられた印刷メディアに加え、ラジオ、テレビ放送を含んだマス・メディア入門書と呼べる形式を示している。各事項末には「研究・討論」のためのテーマがついており、高校生程度でも理解できる内容で、メディア教育の参考書である。

A. Hancock, M. MacCallum, *Mass Communications: Australia and the World* (Camberwell: Longman, 1971, 106p.) は、それまでの非常に実証的なマス・メディア研究のやり方にマクルーハン、シュラムといった学者を初めて導入した。その結果、同書は、例えば、Paperbacks, Sound and Image, Record and the Youth Scene, Women's Magazine, PR といった、それまであまり追究されなかった分野を切り開いた。副題からもわかるように、オーストラリアとアメリカのマス・メディアを比較研究している。

この後少し沈滞とも思える時期があったが、七〇年代半ばにさしかかったころから、マス・メディアに関する研究文献が比較的頻繁に刊行されるようになった。

オーストラリア政治学会 AIP S (Australian Institution of Political Science) は一九三三年以来、さまざまな領域でオーストラリアにかかわる政治問題についての報告をしてきたが、第四一回(一九七五年)夏季セミナーはマス・メディアを中心議題とした。その結果が、G. Major, ed., *Mass Media in Australia* (Sydney: Hodder Stoughton, 1976, 264p.) である。

同書は種々のケース・スタディと Bias in News Reporting, The Great Australian Scandal, Women and the Media など をあげ、討論している。また、メイヤーが "What Should (and Could) We Do About the Media?" (Ch.5, pp. 164-264) と題した論文を掲げ、メディアへのアクセスなどを論じている。

J.S. Western, *Australian Media: Controllers, Consumers, Producers* (Sydney: AIP S, 1975, 39 p.) は、AIP S のモニターグラフの一つである。クイーンズランド大学の社会学教授ウェスタンが七〇年代前半までのオーストラリアのマス・メディアの変遷を概説的に論述し、さらに、オーストラリア人のメディア接触の度合いを数値で示している。中でも興味深いのは、今日再編成の動きが活発であるメディア・グループの歴史的背景がわかりやすく説明されていることだ。マードックと雑誌メディアについても書かれている。

ウェスタン教授はこれより以前、同大学の C.A. Hughes 教授(政治学)と共著で *The Mass Media in Australia: Use and Evaluation* (UQP, 1971) を発表、既に七〇年代初期にオーストラリアのマス・メディア研究を手がけた人物である。同書は一九六六年の連邦選挙前に行われた新聞、テレビ、ラジオの利用についての調査結果をまとめたものである。その意味では、六〇年代半ばのオーストラリア人のメディア接触の状況とみなした方が良いだろう。データ分析は、各メディアがどの程度国民に好まれ、評価を受けているかを示している。具体的には、(1) 政

党への公明性、(2) 国際、国内、州及び地方別ニュースにおいて公平な注意や関心を引き起こしているか、(3) どのメディアがニュースの完璧性、速さで勝っているか、そして政党の指導者や政治問題に関する理解を与えてくれるか、といった命題に答えてくれる。さらにウニスタンは、コスモポリタンの指向、ローカルの指向といった概念にも焦点を当て、分析を試みている。ABCの日本紹介の特集番組(一九七九年放送)などのレポートをしたこともあり、オーストラリアでは著名なフリーランサーでもある J. Temple が著わした *The Mass Media: A Personal report* (A & R, 1975, 148 p.) は、「私はジャーナリストであり、これは個人的な記録でかつ私自身である」と前置きしながらも、ジャーナリストとして、現場の経験を十分生かしたジャーナリズムの文献の一つに数えられる。主にラジオ、テレビといったテンプルの専門分野での体験と分析を取り混ぜた同書は、「この本はジャーナリズムである」と言い切っている。

ホイットラム労働党政権(一九七二―七五年)のユニークな存在として知られたメディア省の最後のプレス・セクレタリーを務めた H. Rosenbloom は、政治操作の重要性と同様に、メディア操作における基本的詳細を述べることに主眼を置いた *Politics and the Media* (Victoria: Fitzroy, 1976, 32 p.) を、フレージャー現政権(一九七五―)移行後に発表した。同書はメディアの構造とコントロール、メディアの政治性そしてメディアと政治性の三部構成をとっており、いずれもプレスと放送の

両面から論証している。労働党政権への批判を適宜に加えながら、政治へのマス・メディアのインボルブメントを取り扱っている。

メディア産業の実体を論じた文献も、最近多い。政治学者の H. McQueen, *Australia's Media Monopolies* (Camberwell: Widescope, 1977, rpt., 1978, 218 p.) がその代表と言われる。二十世紀初頭には二十一の大都市日刊紙が十七のオーナーにより発行されていた。しかし、現在では十七紙(同)に減り、それらはわずか三つのマルチプル・メディア・オーナーに集中している。この今日のメディア独占状態を「オーストラリア特有のもの」と言いながらも、マックキーンは、「ヘラルド・アンド・ウィークリー・タイムズ」(Herald and Weekly Times Ltd.)、「J・フェアファックス」(Fairfax Ltd.)、「マードックの「ニュース」社」(Murdock's News Ltd.)、「パッカー(Kerry Packer)の「コンソリデーティッド・プレス」社(Consolidated Press)の四グループに鋭いメスを入れ、批判している。量的には広告面からのメディア分析に比重を置いているが、具体的な事例をあげながら、メディア産業の実体を考察する新鮮さを与えてくれた。それは、新しい観点に立ったマス・メディア研究文献の登場を促した。

同様に、最近のマス・メディアの実体を探った適書に、P. Edgar, *The Politics of the Press* (Melbourne: Sun Books, 1979, 224 p.) がある。エドガー女史はメルボルン郊外のラートループ大学のメディア・コミュニケーション・センターの主任研究員で、特に放送メディアに関して多くの論文を発表してい

る。現在、「子供番組審議会」の委員長も務める。

同書は、一九七五年の総選挙をめぐるメルボルン四紙——*The Australian, The Age, The Herald, The Sun-News Pictorial*——の内容分析、政治記者へのインタビューが主な内容である。政治キャンペーン、プレス独占・集中化についても紙副を添えている。

再び、シドニー大学のメイヤー教授が著わした研究書を二冊紹介する。H. Mayer, S. Pantzer, comps, *Media Monograph II Australia's Press: Control and Circulation 1974-75* (1975, 34 p.), H. Mayer, comp., *Media Monograph VII: Television and Radio: International and Australian Data* (1978, 16 p.) がそれで、いずれも同大学 Dept. of Government の発行である。

Monograph II は、新聞(大都市日刊紙、日曜・週刊紙)や雑誌の発行部数を中心にした量的分析である。メディア産業を独占する四メディア・グループの比較が一目でわかる。

一方、*Monograph VII* は、オーストラリアのメディア状況全体と主要各国のそれとを比較し、数値に表わしたものである。また、シドニー市でのテレビ、ラジオへのオーストラリア人の接触調査(一九七七年)も行っている。

マードックの「HWT 乗っ取り」工作(一九七九年末)を考察対象とした研究文献はまだ出ていないが、おそらく、G.R. Brown, comp., *Media Ownership-Australia* (Melbourne: Ray Brown Pty., 1979, 36 p.) が、メディア・オーナーシップ

の最新の集中化の様子を教えてくれるだろう。

以上のような単行文献とは別に、定期刊行物でマス・メディアを包括的に取り扱っている雑誌がある。

季刊の *MIA: Media Information of Australia* (Sydney: AFTS, 1976+) は一九七六年以来、新聞、ラジオ、テレビ、映画に限らず、広告、オーディオ・ビジュアル、技術、出版、文化といったマス・コミの広い分野にわたり、最新の文献、研究資料などを網羅してくれる。メディア・リサーチ、進行中の研究概要、内外の参考文献の紹介もあり、オーストラリア唯一の総合マス・メディア研究誌として、*MIA* は多彩な内容を誇っている。^(ix) 編集責任はメイヤー教授が負っており、発行は AFTS (Australian Film and Television School)。ABC (Australian Film Commission) や SBC (Special Broadcasting Service) など、メディア関係団体(政府関係も含む)により援助されている。

〈文中略記〉

- AGPS = Australian Government Publishing Service, Canberra.
 ANL = Australian National Library, Canberra.
 A & R = Angus and Robertson, Sydney.
 Cheshire = Cheshire, Melbourne.
 Dept. of Govt = Department of Government and Public Administration, University of Sydney, Sydney.
 MUP = Melbourne University Press, Melbourne.
 SUP = Sydney University Press, Sydney.
 UQP = University of Queensland Press, St. Lucia.

〈注〉

- (1) Vol. I, 1784-1830; Vol. II, 1831-38; Vol. III, 1839-45; Vol. IV, 1846-50; Vol. V, 1851-1900, A G; Vol. VI, 1851-1900, H P; Vol. VII, 1851-1900, Q Z.
- (2) D.H. Borchardt, *Australian Bibliography: A Guide to Printed Sources of Information* (Cheshire, 1963)
- (3) *Australian Dictionary of Biography* (MUP, 1966+, 8 vols.) ニューサウスウェールズ州立図書館(シドニー市)に在り、*Japan Weekly Mail* の創刊号(一八七〇年一月二十二日)などが所蔵されている。
- (補) W.G. Coppel, *Australia in Figures: A Handbook of Economics, Political and Social Structure* (Penguin Books, 1974, 197 p.)
- (4) 『シドニーガゼット』(一八〇三—四二年)……二代目政府印刷人ハウにより創刊された「半官」的性格の植民地新聞。
- (5) *HRA, Ser. I, Governor's Despatches to and from England: 1788-1848, 26 vols, 1914-25. Ser. III, Despatches and Papers relating to the Settlements of the States: 1803-30, 6 vols, 1921-23. Ser. IV, Legal Papers: 1788-1827, 1922.*
- (6) Vol. I-K, Mar. 5, 1803-Dec. 28, 1811. 同書の復刻版がニューサウスウェールズ州立図書館から刊行されている。
- (7) 『ホバートタウン・ガゼット』……タスマニア植民地の二代目政府印刷人セントにより発行された。一八二五年、政府の手を離れセント個人の所有紙となったが、アーサー副総督が同題名の政府新聞を発行したことにより、姿を消した。
- (8) Vol. I-IV, May 11, June 1, 1816-Dec. 25, 1819.
- (9) 『シドニー・モーニング・メルキュリー』……シドニーを中心として人気のある大衆紙。「フェアファックス」グループに属する。
- (10) ジョン・フェアファックスは一八四二年二月、C. Kemp と二人で本格的な日刊紙となった *SM* を買収。一八五三年から単独所有主となる。
J. Fairfax, "Some Collections of Old Sydney." *JRAAIS*, Vol. 5, Part. 1, 1919, pp. 1-37.
- (11) J. Fairfax, *The Story of John Fairfax* (n.p.)
- (12) 『シドニー』は一八五六年、サーム兄弟に買収され、以後彼の一族(フマミリー)により発行されている。現在、「フェアファックス」グループの有力紙の一つ。
- (13) C.E. Sayers, *David Syme: A Life* (Cheshire, 1965). A. Pratt, *David Syme: The Father of Protection in Australia* (London: Ward Lock, 1908)
- (14) 『リーガス』は一八六七年八月十月、後に *Japan Mail* の編集兼所有主になった John Henry Brooke (1826-1902) の『日本見聞記』(Impression of Japan by an Australian Colonist) を掲載した。
- (15) 拙文「明治前期の英字紙と外人ジャーナリスト」『新聞研究』一九八〇年八月号、八九—九三ページ。
- (16) 『イブニング・ニュース』S. Bennet (1815-78) が率いた一族所有紙。敷設されたばかりの電信を使い、最新のニュースを入手、他の朝刊紙を圧倒した。
- (17) 一九二〇年代までシドニー中心に勢力を誇った H. Denison が発行した夕刊紙。現在は「フェアファックス」グループ。
- (18) オーストラリア・メディア産業の中核の一つ「ニュース」社のオーナー。米・英大陸でも多くの新聞、雑誌などを経営
S. Regan, *Rupert Murdoch: A Business Biography* (A & R, 1976, 246p.)
- (19) R.R. Walker, *Communicators: People, Practices, Philosophies in Australian Advertising, Media, Marketing* (Melbourne: Lansdowne Press, 1967, 416 p.)
- (20) H. Mayer, "Media", H. Mayer, H. Nelson, ed., *Australian Politics: A Fourth Reader* (Melbourne: Longman Cheshire, 1976, 4th, 1977), pp. 120-63. *A Fifth Reader*, 1980. *MIA* 登場以前は、*Australian Political Science Association* の紀要(年一回刊) *Politics* (1966+) が、マス・メディア関係の論文を積極的に掲載してこられた。

▽放送関係主要文献

1. *Annual Report of the ABCB, No. 1-29* (AGPS, 1949-76)
2. *Annual Report Australian Broadcasting Tribunal* (AGPS, 1977/78+)
3. Postal and Telecommunications Department, *Annual Report* (AGPS, 1978+)
4. *FACTS Report*
5. Commonwealth of Australia Royal Commission on TV, *Report of the Commission* (AGPS, 1953, 131 p.)
6. *Vincent Report*, Australia Select Committee on the Encouragement of Australian Production for TV Report (Canberra : Commonwealth Government Printer, 1963)
7. M. MacCallum, ed., *Ten Years of Television* (Melbourne : Sun Books, 1968)
8. *The Media*, A collection of speeches made by the Minister for the Media, Senator the Honourable Douglas McClelland, during the period 16 June-10 December, 1973 (AGPS, 1974)
9. S. Hall, *Sublety* : 20 Years of Australian Television (Melbourne : Sun Books, 1976, 192 p.)
10. H. Mayer, ed., *Australian Media Notes*, Australian Advisory Committee on Media Research (Canberra : Department of the Media, 1975)
11. *Annual Report 1974/75*, Department of the Media (AGPS, 1975, 49 p.)
12. *Green Report : Australian Broadcasting*, A Report on the Structure of the Australian Broadcasting System and Associated Matters (AGPS, 1976)
13. *Cyngeel Report : Self-regulation for Broadcasters*, A report on the public inquiry into the concept of self-regulation for Australian broadcasters (AGPS, 1977, 177 p.)
14. ABT Research Report, *Television and the Public : A Decade of Research 1968-77* (AGPS, 1977, 55 p.)

15. K. Tindall, D. Reid and N. Goodwin, *Television : 20th Century Cyclops* (Sydney : Teachers College Audio-Visual Centre, 1977, 168 p.)
16. AFTS, ed., *Press Coverage of the TV Licence Renewal Hearings-Adelaide 1978* (AFTS, 1978)
17. Senate Standing Committee on Education and the Arts, *Children and Television* (AGPS, 1978, 179 p.)
18. AFTS, ed., *Press Coverage of the TV Licence Renewal Hearings-Sydney 1979* (AFTS, 1979)
19. R.W. Harding, *Outside Interference : The Politics of Australian Broadcasting* (Melbourne : Sun Books, 1979, 219 p.)
20. S. Kippax, P.M. Murray, *Small Screen, Big Business : The Great Australian TV Robbery* (A & R, 1979, 81 p.)
21. SBS, *Ethnic Broadcasting in Australia* (Sydney : SBS, 1979, 63 p.)
22. P. Edgar, U. Callus, *The Unknown Audience*, La Trobe University Media Centre Papers (La Trobe Uni., 1979, 99 p.)
23. H. Mayer, ed., *TV Probe* (n.p., 1980, 80 p.)

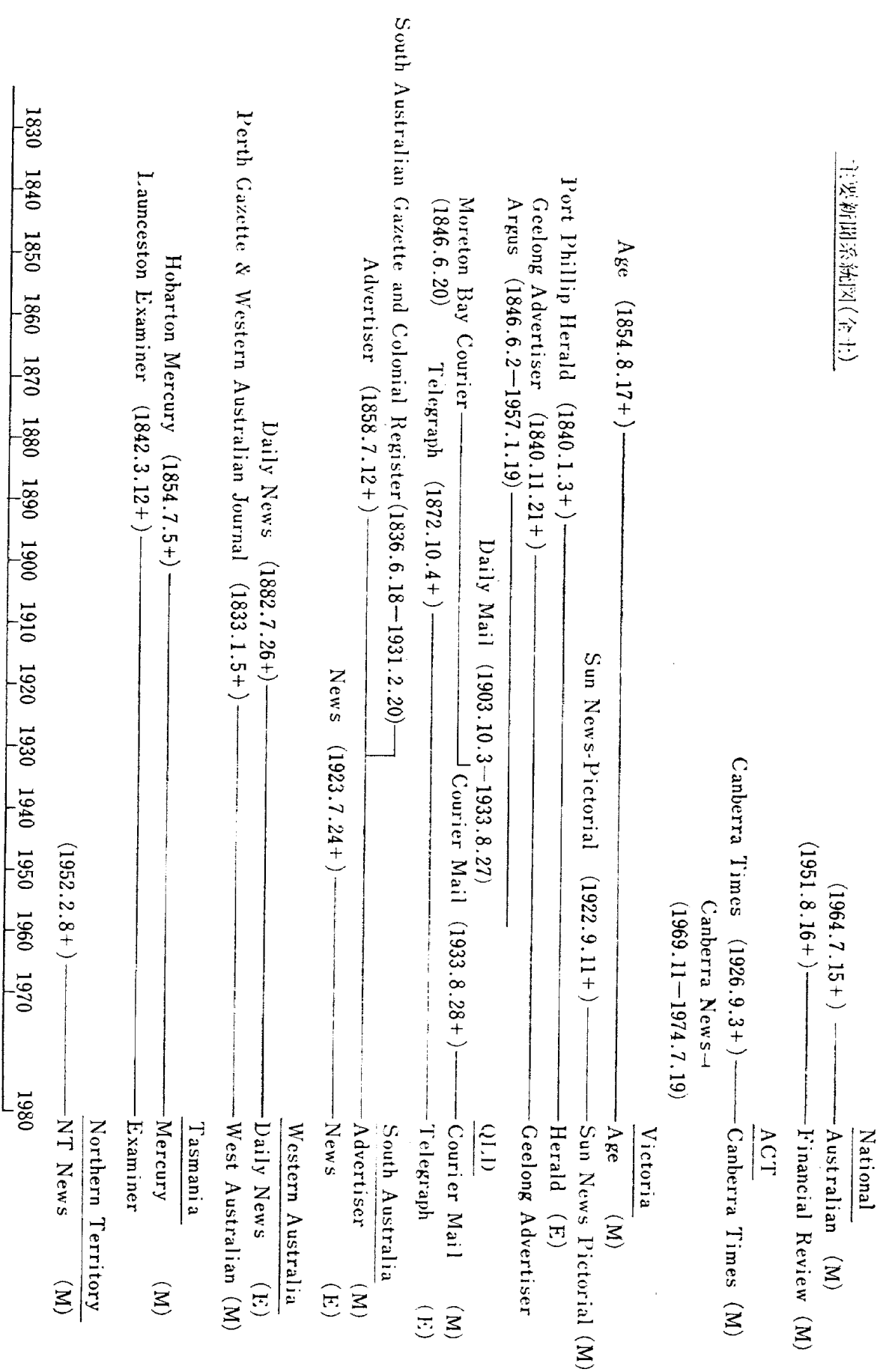
▽邦字(記)文献

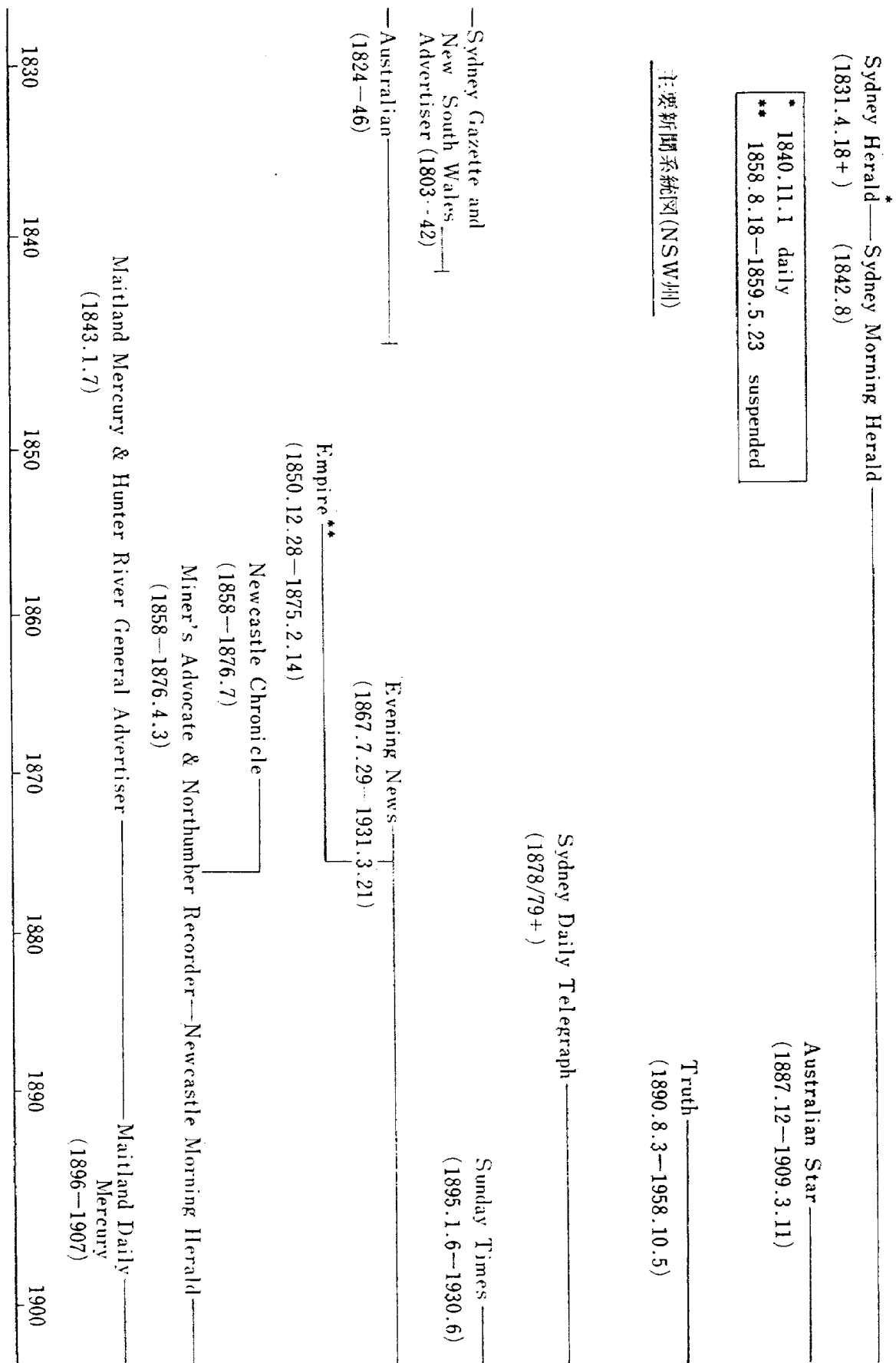
- 吉野光久「ニュー・オーストラリアが始まった」、『新聞研究』一九七六年八月号、四〇―五四ページ。
- 相崎由松「ルバートマードックの『新聞哲学』」、『総合ジャーナリズム研究』一九七九年春季号、四二―五〇ページ。
- 永井良和「メルボルンの新聞」、『新聞研究』一九七九年十一月号、六四―六七ページ。
- 長坂寿久・小林宏訳『距離の暴虐』サイマル出版会、一九八〇年。
- G. Blainey, *The Tyranny of Distance : How Distance Shaped Australia's History* (Melbourne : Sun Books, 1966)
- 拙文「オーストラリアの新聞・放送界」、『総合ジャーナリズム研究』一九八〇年秋季号、五一―六三ページ。

〈補〉

- ・ M. Goot, *Newspapers Circulation in Australia 1632-1977*, La Trobe University Media Centre Papers 11 (1979, 33 p.)
- ・ P. Speeritt and D. Walker, ed., *Australian Popular Culture* (Sydney : G. Allen & Unwin, 1979, 255p.) 巻末の「文献解題」はダンス、映画、ギャングブル、マス・メディア(詩・漫画・児童文学・新聞・雑誌・ノンフィクション・小説・ラジオなど)、音楽、劇場、ショー・ビジネスなどの文献を幅広く掲げている。

主要新聞系統圖(全土)





* 1840.11.1 daily
 ** 1858.8.18-1859.5.23 suspended

主要新聞系統圖(NSW州)

(NSW/M)

